〈書　評〉

坂出祥伸著『康有為』(集英社)

(東京大学大学院博士課程) 坂元ひろ子

中国近代の思想家の多くが，日本と浅からぬ因縁をもつことは知られているが，孫文の場合を例外として，一般書で本格的に紹介されるのは稀である。本書の著者坂出氏が「ここに，わが国で最初の康有為だけで一冊という評伝が，出版されることになった。まず，その喜びを読者のかたがたと分ちあいたい」（265頁）と自慶されるのももっともなことといえよう。

だが著者の「喜び」がいかほどのものかを読者が本当に理解するのは，著者の康有為に対する並並ならぬ思い入れを知ってからのことであろう。著者にとって康有為とは，「一生涯，ただひとつ「大同」の世界を夢想しつづけた，いわば求道者的な思想家」（8頁）である。政治史的には，民国期になおも君主主憲に固執し，清帝復辟を謀るという「時代錯誤の最たるもの」とみえようとも，「時流にうまく調子を合わせて変身することを潔しとしない」康有為に「いくばくかの羨望と愛着を寄せながら，彼の精神の軌跡をたどってみたい」（8－9頁）とある。

「精神の軌跡」をたどるべく著者がとった構成は，一. 康有為の生いたちと青年時代，二. 人に忍びざる心―「万物一体の仁」の自覚と苦悩，三. 第一次上書の失敗と万木草堂の教育，四. 変法運動とその挫折―歴々たり維新の夢，の四章立てである。著者が特に心ひかれたらしい康有為の「大同」世界そのものについては，著者の断りがあり，本書では詳述がないが，「大同」思想への思索の過程をたどろうという努力は認められる。

さて，ここではそうした構成に沿って筋を追う余裕はないので，記述内容で著者が心がけた点を中心に，本書の特色というべき点を概観しておこう。「従来の康有為研究で見過ごされていた側面にできるだけスポットをあてたが，とくに力を入れたのは，師の朱次琦を通しての朱子学とのかかわり，欧米学術とのかかわり，それに彼の書学のもつ思想的意味などである」（268頁）という著者自身の総括があり，以下これに沿って具体的に紹介してみる。

1. 朱子学との関連。著者は康有為の学＝春秋公羊学・今文学とする一般的な見解に対して，それは「あるいは表面だけ見ての判断とも言える」「むしろ，彼の学問は朱子学ではないのか」（38頁）という新説を提示する。まず，清の中ごろから公羊学派と朱子学の桐城派とがそれ以前の訓詁考証学的漢学を批判し始めたという学術史および広東の学界の状況を概説した上で，青少年期は康家の家学である朱子学を学んでいた康有為の師で同郷広東南海の朱次琦（九江）は漢宋兼採の立場だが基本的には朱子学を汲みつつ，漢・宋学の別を超えた孔子本来の学＝「古えの実学」を学の根本とした，とする。そこで，直接に孔子に接すべきだというこの考え方こそ，康有為の『孔子改制考』『大同書』等の後の代表作の基調となった，と著者は指摘するのである。朱次琦の康有為に与えた影響については評者も異議はないが，本書にも紹介のある康有為の陽明学的「万物一体の仁」説や反朱子学的性説・理気論をも勘案すれば，それを朱子学だとことさら強調すべき根拠も意義も稀薄なような気がした。なお，著者は康有為における公羊学を否定しているわけではなく，廖平から示唆された公羊学の張三世説と富強のための「国民的結合の紐帯」としての孔子教とが，現実変革の道と未来の太平大同社会へ至る道との接点となった，とみなしている。

2. 欧米学術との関連。康有為の自然科学から政治・経済，宗教に至るまでの西洋学術への強い関心，その情報源などが詳細に示されており，当

時の西欧知識の概要を知る上でもたいへん参考になる。これまで中国思想と西欧科学・学術との関連追求を手がけてきた著者ならではの成果である。著者は，智と同一物の内外をなす「愛悪〔憎〕」に根本を求める康有為の人間論にもキリスト教・西欧的な倫理思想の影響を感じるとし，知覚の拡大による社会倫理の形成を考えた戴震の説にも遡って言及，これもまた明末清初の宣教師の書に遠い淵源をもつと示唆している。評者には，後者がむしろ興味深い指摘であると思えた。

3. 書学（論）のもつ思想的意味。康有為が日本では書家・書論家に最も知られているらしいことも本書で知ったほどこの分野に疎い評者にとって，学ぶところが多い部分だ。ここで主となるのは，18世紀ごろから法帖を模範とする行草書より碑碣に刻された篆隷を重んずる方向に変化していったという書学史，その流れの中で，一時は碑学に沈潜した康有為が著した有名な書論『広芸舟双楫』の紹介である。著者は康有為の書論から,「漢隷の古意」を受けているとみなすがための六朝碑への高い評価および繁から簡への「文字流変説という一種の進化史観」の二点をその特色としてとりあげ，後者が「『新学偽経考』の古文経書偽作説の重要な論拠となっている」（128頁）と指摘している。見事な指摘だ。

4. 以上の三点の他，最終章のしめくくりに，従来ほとんど紹介されていない康有為「須磨流寓の二年」間（1911－13年）を周到な資料調査で明らかにしていることも，本書の特色に数えるべきであろう。

こうした特色をもつ本書は，読物風シリーズの一冊とはいえ，「最近の日本・中国・欧米での研究成果を十分とりいれて書いた」（268頁）という著者の自負に違わない力作とみなしうる。成田史料館等，国内に保存されている未刊史料の丹念な掘り起し，また，康有為の妻妾同居生活を示すものなどを含む数多くの貴重な関連写真の収録も高く評価すべきだろう。

本書の欠点というより，評者が抱いた最大の疑問をいわせてもらうなら，それは康有為観・評価の問題ということになる。率直にいって，「苦悩せる民を救わんとしたキリストに比すべき救済者，教祖」（189頁），純粋な宗教的求道者，ユートピアンという康有為観・評価に評者はなじめない。康有為の一面としてならともかく，全体像としてそう規定するのには賛同しがたいのだ。一貫した科挙試験への執着，中央志向の政治活動，著作およびその改訂にあらわれた自己美化等をみても，よくも悪くもしたたかな士大夫ふうの権威主義的側面があり，「上から采配をふるう政治屋ふうなところがあって，その思想様式に企画表示ふうな傾きがあった」（西順蔵，西編『原典中国近代思想史』第2冊243頁）ことも否めないのではないか。ともあれ，やはり康有為のユートピアにも論評を加えた上で，より多面的・総合的な評価を下す必要があるだろう。

日本での康有為評価の低さを歎く著者は，その原因として，政治状勢によって評価を変える「社会主義国」中国の「愚行」に日本が「追随」し，「革命派（孫文ら）＝善玉，改良派（康有為ら）＝悪玉という図式で片づけるようになった」（7頁）という，中国解放後から近年の近代化路線による康有為再評価前の研究状況をあげる。著者のいう通りならばまことに救いがないが，「私のように康有為を研究している者まで，肩身の狭い思いをしなければならなかった」（同上）とまでいわれると，後学の評者には，中国でならいざしらず，いささか被害妄想めいた思いすごしではないのかとさえ思えてくる。これは近ごろの「中国近代像の歪み」論にも感じることなのだが，世代の差による状況認識・問題意識のズレなのだろうか。どうもピンとこない。慷慨力説されるほどシラけてしまうのは評者だけなのだろうか。

（1985年4月刊，四六判，269頁，1400円）